

9月16日(出) 研究発表第5室(716)

英文を発想する場合の the の使い方について

A Practical Approach to How to Use "the" Like a Native Speaker

(キーワード: 文脈指示、前方照応指示、場面状況指示、後方照応指示、主観的对象特定)

坂井 孝彦

1. はじめに

冠詞の使い方は難しい、言われている。日本(1992, JACET 全国大会)の発表レジメには、「しばしば冠詞の選択(可算性の選択を含む)はある文脈では義務的ではあるが、ある文脈ではかなり任意的な場合もある、という主旨のことを耳にする」と記載されている。冠詞の使い方の難しさの一端に言及されているように感じられる。「ピーターセン(1988)」は、冠詞の使用不使用は、文脈がすべてである、と述べている。文法の教科書や参考書あるいは辞書にもさまざまな使い方が述べられているが、説明がかなり多義にわたり、多くの学生は投げ出してしまうほどである。しかし、冠詞の使い方がわからなければ、よい英文を書くことは難しい。私たちは日本文においては、「が」や「は」のような助辞をあまり苦勞せずに使ってゆける。それと同様な感じで、英文を書くときも the をあまり苦勞せずに使ってゆけることができないものであろうか。

2. the の使われ方と使い方

書き言葉であれ、また、話し言葉であれ、書き手(話し手)が the によって特定した名詞的情報が、聞き手(読み手)も共有できる指示内容であれば、書き手は安心して the を発想した英文を構成することができる。従来、「the を用いるときは、相手のことを考えなければならぬ、そして相手がその対象物をすでに知っていると思えば、the を使ってよい」と言われてきているように思う。「談話文法研究、大島 真著、リベール出版」を見ると、Halliday & Hasan(1976)の枠組みをもとにした the の意味機能が、2つに分類されて掲載されている。1つは、話し言葉に多くみられる「場面指示」である。もう1つは書き言葉に多く見られる「文脈指示」である。前者はさらに2つに下位分類され、「場面状況指示(例 Please shut *the* door.)」と「唯一典型指示(例 This is *the* only example I can give you.)」に分かれている。後者も同じように2つに下位分類されている。「前方照応指示」と「後方照応指示」である。「前方照応指示」はさらに3分類され、直接的に前方を指示するもの(例 Sometimes planning a trip can be almost as much fun as *the* trip itself.)と内包的に指示するもの(例 Spring has come; *the* birds are singing and *the* flowers have begun to bloom.)と敷衍的に指示するもの(例 We're going to have a Pen Pal Club. *The* plan was suggested by our teacher.)となる。the の文脈指示においては、「前方照応指示」の場合は、それが直接的であれ、内包的であれ、あるいは敷衍的であれ、書き手と読み手の間における齟齬はあまり生じないであろう。あるいは口語における場面状況指示のような場合にもあまり齟齬は生じないであろう。齟齬が生ずるかもしれないのは、後方照応文脈指示の場合であろう。外国語としての英語を書く学生に、後方照応指示として説明される the の発想方法をどう説明して納得させればよいのだろうか。母語を英語とする人々もほんとうに、「まだ見ぬ後方」を照応しながら、今この「前方」に、the を発想することができるのだろうか。文頭から、そして左から右へと自然な流れにそって発想してゆく英語を書くことができるようになるためには、the もまた、文の頭の方から選択されているのではないだろうか。ある the が、後方の文脈を指示して使われているのだとすると、ほ

とんどの日本人にとって英文を左から右へと発想のままに綴ることはできなくなるのではないだろうか。ネイティブの人々もしゃべるときや書くときには、*the* についてもやはり、文頭の方から発想しているのではないだろうか。

『BBC English Dictionary (1992)』は、次のような説明をしている:

“You can use *the* in front of a noun in order that you are referring to a person or thing when you are going to give more details about them.”

この説明によれば、*the* で特定した名詞的情報のその後方の句や節において、その特定した名詞的情報についての内容や詳細を追加して説明すればよいことになる。つまり、*the* で特定した名詞的情報に対して、それに対する新情報を追加すればよいのである。

こういうことを学生に説明してきた時、ロス・生田(1994)の発表(JACET 全国大会)を聴講する機会に恵まれた。書き手はいわば主観的に *the* を選択できるのだ、というご説明である。英文を書くことに不慣れで苦勞している立場から心からの賛意を表したい。

英文を書いてゆくときには、書き手はつぎのようなプロセスをふんでいるのではなからうか。書き手や話し手は *the* で特定した名詞的情報の後方の句や節において、聞き手がひょっとしたら質問してくるかもしれない想定質問に答える形で、必要に応じて、詳細説明を追加しているのであろう。出来上がっている英文のなかのある名詞的情報についてみた場合、それがその後方にある関係節、前置詞句、不定詞、分詞などの *qualifiers*(*postmodifier*) によって限定されているから、前方にあるその名詞的情報に *the* が付くのだ、のように考えると、英文を文頭から自然に左から右へと流れのままに発想してゆくことが困難な作業となるようである。*the* が「後方照応文脈指示」によって選択されているのだ、とする説明するのは、すでに出来上がっている英文全体をながめている場合における明解な説明であろう。だから「後方照応文脈指示」という説明は、流れのままに発想してゆく英文を作成しようとしている学生にとってはかえって混乱の種となる場合もある。対象物を特定化したその時点で、書き手は、その対象物が聞き手と間で共通領域に入っていない対象物であると考えれば、その対象物に対して、さらなる説明を、あるいは新情報を追加してゆけばよいのである。特に口語の場合には、話し手は、聞き手が場面状況などによってその追加の説明なしでその対象物を了解できると考えれば、それ以上の情報は提供しない場合もあるだろう。ネイティブ同志の間ではあるいは、ネイティブの書き手が特定した対象物に対して、ネイティブの聞き手もその共通認識によって(日本人同志の間での、「が」と「は」の使い分けのように)その指定対象物を追加説明なしで、追認できるのかもしれない。しかし、母語を日本語とする英語学習者には、その自信のない場合が多かろう。だから、自分だけの対象物であるかもしれない、と考えた場合は、これに対しては、多くの場合さらに説明を追加してゆくことになる。*when*, *where* などで始まる想定質問に答える形で、*qualifiers*(*postmodifiers*)を使って新情報を追加してゆくのである。英語は「建て増し」が自由自在の言語だからである。口語では、話し手が特定した対象物を、聞き手が、共有物として了解できなければ、話し手の特定不足を補う形で、聞き手は特定物を求めて質問をすることになる。これが話し言葉の本質なのかもしれない。

3. *the* の実際面での使い方

当日の発表では英文を文頭からの自然の流れのままに購読・作成してゆくという点に焦点をあて「*the* の誤“私”用例」を中心にして、ご説明させていただく所存です。

9月16日(土) 研究発表第5室(716)

t h e の誤用例

おかし
Cookies

いたずらに一つかくした
Half in fun, I concealed
弟のおかし。
a cookie from my brother.
たべるもんかと思つて、
At first I intended never to eat it up
たべてしまった、
but that ended in vain:
一つのおかし。
no more cookie left for him.

かあさんが二つツていったら、
Mother might say, at any moment,
that surely she served two cookies for us.
どうしよう。
I was scared: how should I respond?

おいてみて
I placed his cookie on the plate
とつてみてまたおいてみて、
and took it up and placed it back there again.

それでも弟が来ないから、
And yet, my brother didn't show up

たべてしまった。

二つめのおかし。

* until finally I had committed
an error of a second helping.
⇒ until finally I had committed
the error of a second helping.

にがいおかし、
How bitter it was!
かなしいおかし。
What a heart-rendering matter it was!
(金子みすず)

しかられるにいさん
My Brother Scolded

にいさんがしかられるので、
My brother was called down,
さつきからわたしはここで、
so I have been here for some time,
そでなしのあかいひもを、
むすんだり、といたりしている。
repeatedly knotting and unknotting
the red strings of my sleeveless coat.

9月16日(土) 研究発表第5室(716)

それなのに、うらの原では、

For all that, from the field at the back
さっきからしろ取りしてる、

I hear my friends playing aloud
with word games for some time
ときどきはとびもないてる。

* and kites as well shrieking once in a while.

⇒ and the kites as well shrieking once in a while.

(金子みすず)

だるまおくり

A Dharma-tumbling Relay Race

白勝った、

The White has won!

白勝った。

The White has won!

そろって手をあげ

All of us together put up our hands in the air,

「ばんざあい」

crying, "Banzai[Hurrah]!"

赤組のほうを見て

We glance at the Red,

「ばんざあい」

crying again, "Banzai[Hurrah]!"

だまってる

"You keep silent, don't you?"

赤組よ、

hey, Red!"

秋のお昼の

日の光り

土によごれて、ころがって、

赤いだるまがてられてる。

* In the sunshine

after the noon in fall,

⇒ In the sunshine

after noon in fall,

the red Dharmas, soil-stained and tumbled,
are basking in the full sunlight.

もう一つと

先生がいうので

Encouraged by our teacher

to cry it once more,

「ばんざあい。」

we say, "Banzai[Hurrah]!"

すこし小声になりました。

in a little lower voice this time.

(金子みすず)